

随筆

私と空手・古武道

(株)環境設計国建
嶽元眞志

社会人になって沖縄に移住した本土出身の私は、沖縄に住むからには何か沖縄特有のものを身に付けたいと思い、12年前に、沖縄が発祥とされる空手・古武道の門を叩いた。高々12年程度の経験で空手・古武道を語るなんて恐れ多いことであるが、どうかご容赦願いたい。

「気をつけ！礼！」今日も稽古が始まった。一見堅苦しいと思うかもしれないが、私はこの締まった空気と張り詰めた感覚が好きだ。稽古中は自分が最も自分らしく居られる時間だ。仕事で疲れた身体と心も、稽古で汗を流せば、ストレスも疲れも汗と一緒に流れてリフレッシュでき、大変助かっている。

まず、空手道について。私が学ぶ流派は、沖縄の戦後の4大流派といわれるうちの一つで、上地流という。流祖・上地完文先生が中国・福建省より持ち帰った3つの型、三戦（サンテン）、十三（セーサン）、三十六（サンセイリュウ）を軸に、8つの型がある。他の流派に比べると数こそ少ないが、型一つを大成するにも多くの年月が掛かり、地道な鍛錬の反復が必要だ。上地流は四本貫手（聞手での突き）や足先蹴り（足の爪先での蹴り）など、中国色が濃く残る貴重な流派だ。



ゆかりの地・本部町伊豆味での奉納演武（三戦）

小手鍛え・下肢鍛えという稽古がある。上地流の宝である。手足をお互いにガンガンとぶつけ合い、鍛える。入門当初は青症を絶えず作り、痛い思いをしたが、次第に慣れてくると「棒切れくらい折れるのではないか？」と試したくなるから不思議だ。いやいや、慢心が一番の敵である。「空手に先手なし」との有名な格言のとおり、どこまでも受け・捌きを基本として「攻撃を漸砕する受け」を目指して、日々修練を繰り返さなければならない。空手は戦わないためのものである。戒めなければならない。